

ヴォルフガング・ボルヒェルトの

『明日のための木』（一九四七年）について

ライナー・ケネツケ 著  
竹 岡 健 一 訳

■ テキスト

彼はフロアのドアを後ろ手に閉めた。自殺するつもりであったにもかかわらず、彼は、静かにかつひつそりと背後のドアを閉めた。人生、それを彼は理解できず、また人生において彼が理解されることもなかった。彼は彼が愛した人々によって理解されなかった。そして丁度今、彼はそのことを、つまり彼が愛した人々とすれ違っていることを我慢できなかったのだ。

だが、すべてを覆い尽くすまでに大きくなりすぎ、押し退けられようとはしないより多くのものがあつた。

それは、彼が愛した人々がそれを聞くことがないままに、彼が夜泣くことができるということだつた。それは、彼が愛した母親が年老いたのを彼が見たこと、彼がそれを見たことだつた。それは、彼が他の人々と一緒に部屋の中に坐り、彼らとともに笑うことができながら、しかも彼がそれ以前より孤独なことだつた。それは、彼が銃声を聞いたとき、他の人々はそれを聞かなかつたことだつた。彼らはそれを決して聞こうとしなかつた。それは、彼が愛した人々とのこのすれ違い

ヴォルフガング・ボルヒェルトの『明日のための木』（一九四七年）について

であり、それを彼は我慢できなかった。今、彼は階段吹き抜きにおり、屋根裏部屋へ上がって自殺しようとしていた。一晩中、彼はどのようにしてそれを実行するか考えた。そして、とりわけ屋根裏部屋へ上がるべきだと決心した。というのも、そこなら一人だろうし、それはその他一切の前提条件だからだ。彼は射殺するための道具はなにも持っておらず、毒殺もあまりにあてにならなかった。医者のおかげで再び生き返ること以上の、彼に対する愛と不安に満ちた他の人々の非難のこもった同情した顔つきを我慢せねばならないこと以上の醜態はあるまい。そして入水自殺、それを彼はあまり大袈裟過ぎると思った。また、窓から飛び降りること、それを彼はあまり激し過ぎていると思った。いや、屋根裏へ行くのが一番いいだろう。そこでは一人だった。そこは静かだった。そこではすべてがまったく目立たず、とてもひっそりとしていた。また、そこにはとりわけ屋根の骨組みの横梁、物干し用の紐のついた洗濯籠があった。フロアのドアを静かに後ろ手で閉めたとき、彼はためらうことなく階段の手すりをつかみ、ゆっくりと上の方へ歩いた。階段吹き抜きの上の円錐形のガラス屋根は、とても細かい金網でクモの巣のように覆われており、青白い空を通したが、それはこの上の屋根の真下で一番明るかった。

彼は清潔な薄茶色の階段の手すりを握りしめ、静かにそしてひっそりと上へ歩いて行った。そのとき、彼は階段の手すりの上に幅の広い白い線を発見したが、それはあるいはいくらか黄色がかつてもいた。彼は立ち止まり、その上を指で触った。三・四回。そして彼は振り返った。その白い線は、手すり全体の上を伝って続いていた。彼は前方へやや身をかがめた。そう、それは下へ向かって、もっと暗い階の低いところまで追い続けられた。そこでは、それは同様により茶色っぽくなったが、しかし手すりの木材よりも全体の色合いが一段明るいままだった。彼は、指を白い線の上を伝って二・三回走らせた。それから彼は突然言った。ぼくはあのことをすっかり忘れていたんだ。

彼は階段の上に坐った。そして今ぼくは自殺しようとしており、あのことをほとんど忘れてしまっていたのだ。あのと

き、ぼくだったじゃないか。カールハイイツのものだった小さいやすりを持っていたのは。ぼくは握りこぶしにやすりを持ち、そして全速力で階段を降りながら、やすりを柔らかい手すりに深く押しつけた。カーブでは、ぼくは速度をゆるめるために特に強く押しつけた。ぼくが下に着いたとき、屋根裏から一階までの階段の手すりに、深い深い溝が一本ついた。あれはぼくだった。夕方すべての子供たちが事情を聞かれた。わが家の二人の女の子、カールハイイツ、それにぼくが。そして隣家の男の子が。家の女主人は、これは少なくとも四十マルクはかかる、と言った。だが、ぼくたちの両親は、それはぼくたちの中の誰のせいでもないということにすぐ気づいた。それにはかなり鋭利なものが必要だが、ぼくたちのうち誰もそれを持っていなかった。両親はそれをよく知っていたのだ。おまけに自分の家の階段の手すりの外観を損なう子供などいまい。それにもかかわらず、あるときはぼくだった。先の尖った小さいやすりを持ったぼくだったのだ。階段の手すりの修理のための四十マルクを払おうとする家庭がなかったとき、女主人は、激しく破壊された階段吹き抜きの修理費用のため、次の家賃の請求書に一世帯につき五マルク余分に書き付けた。このお金で、階段吹き抜き全体がリノリウムで敷き詰められた。そしてダウス夫人は、裂けた手すりでも破れた手袋を弁償してもらった。一人の職人が来て、溝の縁に平らにかんなをかけ、パテで塗りつぶした。屋根裏から一階まで。そしてあれはぼく、ぼくだった。そして今ぼくは自殺しようとしており、あのことをほとんど忘れてしまっていたのだ。

彼は階段の上に坐り、一枚の紙切れを取った。そこに彼は、階段の手すりに関する件はぼくのせいでしたと書いた。そして彼は、その上の方にこうに書いた。女主人カウフマン夫人へ。彼はポケットからお金を全部取り出した。二十二マルクだった。そして紙切れをそれに巻きつけた。彼はそれを上の方の胸の小さな内ポケットに突っ込んだ。彼らはきつとそこにそれを見つける、いや彼らはそこにそれを見つけるに違いない、と彼は考えた。そして彼は、もはやだれもあのことを思い出さないうと、いうことをすっかり忘れていた。彼は忘れていた、あれからもう十一年たったこと、それを彼は

忘れていた。彼は立ち上がった、階段が少しぎいぎいと音を立てた。彼は今、屋根裏へ上って行くつもりだった。彼は階段の手すりに関する件を片づけ、今、上へ行くことができた。彼はそこで、自分が愛した人々とすれ違っているというように、彼はもはや耐えられないのだと、もう一度大声で言うつもりだった。それから彼はあれをするつもりだった。それから彼はあれをするだろう。

下でドアが一つ開いた。彼には母親の話し声が聞こえた。石鹼粉を忘れちゃいけないとあの娘に言ってちょうだい。決して石鹼粉を忘れないようにと。あの子は私たちが明日洗濯できるような木を取ってくるためにわざわざ車で出かけたよ、あの娘に言ってちょうだい。もう自分が車で出かける必要がなく、あの子がまた戻っていることが、お父さんにはとても安心なことでしょうと、あの娘に言ってちょうだい。あの子は今日わざわざ出かけて行ったのよ。お父さんは、それはあの子にとって楽しいことだろうと言ってるわ。あの子はここ数年ずっとそれをすることができなかったもの。今、あの子は木を持つてくることができるのよ。わが家のために。明日の洗濯のために。あの子はわざわざ車で出かけたよ、石鹼粉を忘れないようにと、あの娘に言ってちょうだい。

彼には一人の女の子の声が答えるのが聞こえた。それからドアが閉められ、女の子は階段を走って降りた。彼は彼女の小さく滑らかな手を、手すり全体に沿って下まで追うことができた。それから、彼には彼女の足音だけが聞こえた。そして静かになった。静けさがたてる物音が聞こえた。

彼はゆっくりと階段を下りて行った。一段一段ゆっくりと下の方へ。彼は言った、ぼくは木を取りに行かなきゃならない、もちろんぼくはそのことを忘れていたんだ。ぼくは木を取りに行かなきゃならないんだ、明日のために。

彼はだんだん速く階段を降りて行きながら、自分の手を手すりの上に軽く続けて叩きつけた。木を、と彼は言った、ぼくは木を取りに行かなきゃならないんだ。わが家のために。明日のために。そして彼は、最後の数段をなんとか大きく跳

躍して飛び降りた。

一番上では、厚いガラス屋根が青白い空を通した。だが、下のここでは、ランプが灯っていなければならなかった。毎日。毎日。

(出典 ヴォルフガング・ボルヒェルト『悲しきゼラニウム、および遺稿からのそのほかの物語』ローボルト文庫版出版社「ラインベック」一九六七年。)

## ■ 解釈

### 一、略伝と著作に関する指摘

三七頁以下を参照のこと。(拙訳「ヴォルフガング・ボルヒェルトの『パン』(一九四六年)について」(鹿児島大学法文学部紀要『人文学科論集』第五二号、平成十二年、四一―六〇頁)の四二―四三頁を参照されたい。)

### 二、形態的特徴

#### 二、一、短編の構造

短編『パン』と同じく、『明日のための木』もまた、時間と空間の関連によって形成された明快な構造を示している。この短編は、あるアパートの階段吹き抜きでの一〇分にもならない時間・空間を描いている。そのさい、語りの時間は、語られた時間とほぼ完全に等しい。

ガチャリと閉まったドアでもって、筋は突然始まり、すぐさま一種の回想によって中断される。つまり、さし当たりま

ヴォルフガング・ボルヒェルトの『明日のための木』(一九四七年)について

だまったく影のような「彼」の自殺の意図、および彼の決心の動機が、導入節のわずか数行で伝えられるのである。この人間は内面的危機の状態にあり、彼には自殺がそこからの唯一の逃げ道だと思われているのである。

より短い第二節は、「だが、「……」より多くのものがあつた」という言い回しでもって、この男の願望の背景に関するより深い考察へ移行する。自分の自殺の正当化とそれに最も都合の良い死に方について、彼が前もって「一晩中」行った熟慮が再述され、その結果、ここに最初の遅滞（筋の展開を遅らせ緊張を高めること＝訳者注）が認められうる。

第三節の終わりに言及されている、階段吹き抜きで見えてくる「青白い空」の指摘は、「上へ」の、つまり屋根裏部屋への歩みを描く次の段落へと移行する。階段の手すりを握りしめることは、「そのとき」という副詞によって導入され、外的出来事を突然妨げるもう一つの遅滞をもたらす。直接説話（「ぼくはあのことをすっかり忘れていたんだ。」）によって、次の——十一年前に遡る幼年時代の——長い回想が用意される。

子供のときの過ち、羽目はずして手すりを破損したこと、それを白状できない臆病さ、そしてこのとつくに忘れたエピソードの結果が、詳細に、多数のディテールを伴って描写される。自殺のもくろみの実行がここで（読者の視点から見れば）再度延期されることによって、時間が引き延ばされ、事件の結果に関する不確かさと期待の感情が読者に伝えられるのである。

詫び状を書いた後、この若い男は、今やさらに「上へ」と歩みを進めるつもりである。しかしながら、自殺するという決心の当初の固さは、階段の上での遅れによって揺るがされる。彼はすでに自分に勇気づけの言葉をかけねばならぬ（「彼はそこで、「……」と、もう一度大声で言うつもりだった。」）、そしてそのとき、彼はまたしてもその企てを妨げられるのである。次の節の始めで、今や物語の究極の転換が始まる。すなわち、「下でドアが一つ開いた。」その転換を意味するのは、妹への母親の——彼に聞かせるべきではない——かなり長い要求である。

さらに続く大変短い数節で、筋は再び動き出し、この若い男は、まず「ゆっくりと」、それから「だんだん速く」階段を降りる。最終的に、日常の事柄（「毎日。毎日。」）とその要求に再び立ち向かうためにである。

## 二、二、語りの態度と言葉

『パン』の分析のさいすでに述べられたように、語りの態度の様々な形式の間を流動的に移り変わることが、ヴォルフ・ガング・ボルヒェルトの短編の特徴的な目印である。したがって、『明日のための木』もまた、三人称の語りの形式による中立的な語りの態度で始まる。すなわち、「彼はフロアのドアを後ろ手に閉めた。」この文章が表しているのは、もっぱら観察する語り手の外的視点である。これに対し、早くもそれに続く「自殺するつもりであったにもかかわらず、〔……〕」という文章は、——依然として中立的な語り手の視点からではあるが——内面的出来事ないしは動機に言及している。また、さらに続く文章「人生、それを彼は理解できず、また人生において彼が理解されることもなかった」はすでに、作中人物に反映する語り手の声を聞こえさせ、その視点によって仲介された形で、この若い男の絶望を表現している。「彼が理解されることもなかった」ということは、疑いなく彼自身の主観的な視点であり、この短編の終わりの方で母親の言葉によって修正されるものなのである。

この物語の外面的な筋は比較的わずかであり、語られた出来事は圧倒的に主人公の内面で起こる。したがって、『明日のための木』の結末部分における転換点まで、内的視点が途切れることはほとんど一度もない。ただしそのさい、ボルヒェルトは語りの態度の形式に巧みな変化をつけており、その結果、中立的な語り手と作中人物に反映する語り手がお互いに互に現れている。次にあげる文章では、中立的な語り手の視点から作中人物に反映する語りの形式への移行が、ほとんど気づかれないうちになされている。つまり、行動している人物自身の視点からの思考の反映が、非人称の「人へman」

と接続法によって示されているのである。„Er hatte die ganze Nacht überlegt, wie er das machen wollte, und er war zu dem Entschluß gekommen, daß er vor allem auf den Boden hinaufgehen müsse, denn da wäre man allein und das war die Vorbedingung für alles andere.“（「一晩中、彼はどのようなにしてそれを実行するか考えた。そして、とりわけ屋根裏部屋へ上がるべきだと決心した。というのも、そこなら一人だろうし、それはその他一切の前提条件だからだ。」なお、原文の斜体による強調は訳者。）そして、少し後でこの夜の決心が確認されるが、それは強情な印象を与える。「いや、屋根裏へ行くのが一番いいだろう。」ぞつとすると同時に救いのない行為への緊張に満ちた決心を、前夜についての記憶からもう一度取り戻すこの瞬間に、読者は体験話法を通して内面的な出来事へ引き込まれ、人生に疲れたこの若い男の道連れにされる。読者は、この自殺の企てに若い人特有の未熟さがなくはないことを感じるのである。

出来事の経過の中で最初の遅滞を生ぜしめる詳細な反省が終了するとともに、語りの態度はもう一度変化する。中立的な語り手は、「フロアのドアを静かに後ろ手で閉めたとき、〔……〕」という物語の最初の文を取り上げ、次に続く出来事を外的視点から伝えることに着手する。だが、第二の遅滞は、作中人物に反映する語りの態度への再度の転換を強いる。「そう、それ（子供のときのいたずらによって生じた階段の手すりの上の白い線||筆者注）は下へ向かって、もっと暗い階の低いところまで追い続けられた。」

階段の手すりの上に驚くべき発見をしたことがもたらす結果をこの若い男が熟考するとき、さらに鋭い移行が生じる。すなわち、一つの新しい節あるいは引用のハイフンによって準備がなされることなしに、語りの態度にフェード・オーバー（二つの場面が溶暗し、次の場面が溶明する技法||訳者注）が形成されるのである。「彼は階段の上に坐った。そして今ほく（！）は自殺しようとしており、あのことをほとんど忘れてしまっていたのだ。」内的独白が中立的な三人称形式に取って代わり、それによって読者は、この若い男の思考世界への洞察を、体験話法の場合よりもより強烈に得ることに成功す

る。

この比較的長い節は、すでに引用した一組の文章で終わるのだが、ただし、それは今回はあべこべに配列されている。すなわち、「そして今頃は自殺しようとしており、あのことをほとんど忘れてしまっていたのだ。(改行)彼は階段の上に坐り、「……」。(そのさい、この出来事が重複して語られるという点では、ボルヒェルトは間違っている。というのも、へ階段の上に坐ることへは、もうすでに話題になっているからである。この不正確さに、人生の最後の数カ月間——遺稿に含まれるこの短編はその間に生じたのだが——にある危篤の男性の素早い、それどころか慌ただしいと言ってよいほどの仕事のやり方の一つの証拠が見て取られよう。ボルヒェルトは、このでこぼこを除去するための時間をもはや見出せなかったのである。)

ポケットの中の紙に書いた文書による告白という助けと、その紙に包まれたお金による遅ればせの弁償の試みは、まるで子供っぽい印象を与え、次のことを示している。つまり、自己の決心によって自ら陥った状況を解決するだけの力が、この若い人間にはそもそももないということである。ここで一瞬だけ中立的な態度から局外の語り手による態度へ転換する語り手は、寛大な、ほとんど同情によって担われた言葉で、次の点に注意を促している。「彼は忘れていた、あれからもう十一年たったこと、それを彼は忘れていた。」

屋根裏部屋への歩みは、このわずかな引き延ばし(回想・紙切れに書くこと)ゆえに、より精密な検討のさいに次の文章が証明するごとく、そう容易なことではなくなる。「彼は階段の手すりに関する件を片づけ、今、上へ行くことができた。」ここでは、中立的な語り手の声は、ただ表面的に聞かれうるのみである。すなわち、実際には、この文章は独り言として、つまり体験話法として把握されうる。この解釈を裏書きするのは、この節の終わりで強調された繰り返し、すなわち「それから彼は、あれをするだろう」である。これはすでに大変不確かに、疑わしく響き、この若い男の矛盾した

感情を再現している。

この短編は、終わりの方で再度、中立的な語りの態度によって完全に規定される。すなわち、母親の（直接話法で再現された）言葉は、自己の行為にもはそれほど確信を持たなくなったこの若い男を、階段を再び降りる気にさせるのである。これに対し、「だが、下のここでは、ランプが灯っていなければならなかった」という最後の言葉は、もう一度、局外の語り手による立場をとる例の語り手のものである。この語り手は、話法の動詞「いなければならなかった」を用いて、よりよい未来に対する確信と責任に注意を促すことにより、出来事の幸運な方向転換を、明らかに満足して解説している。

ボルヒェルトの短編の基本的特徴の一つに、先行する解釈においてすでに強調されたような、言語の単純な型の表現豊かな利用がある。描かれた状況と表向き日常的なテーマに適應せねばならないがゆえに、日常の事柄から借用された言語使用が、修辞上の彩を集中して使うことによって、技巧を凝らした迫力ある文体に濃縮させられたのである。それゆえ、この文体は、わざとらしいと批判されたり、どぎついと同時に誇張して描かれていると酷評されることがある。そのさい見落とされたのは、この表現方法が全然気取ったものではないということである。ボルヒェルトの短編は、まさに、表面上の地味さと、その背後にある悲劇性、ないしは日常性の中に潜む危険性との間の緊張に依存している。そこから、一見過度に引き伸ばされたようだが表現力豊かな効果を持つ奇妙な表現方法、すなわちボルヒェルトにとって非常に典型的であり、とりわけ彼の作品の評価を確立した表現方法が理解されうるのである。

短編『明日のための木』の最初の節がすでに、まごうかたない簡単な言葉の感銘を与える使用という印象を、また修辞によって生じたその詩的濃縮という印象を与える。文体上の彩の集積が全体として、この若い男の内面的絶望と彼の自殺の決心を表現することに貢献している。そのさい、首句反復、結句反復、および前辞反復として使用された多くの反復を通じて、文構造の中に、緊密な編み細工が生じている。„*Er machte die Eragentür hinter sich zu. Er machte (首句反復) sie*

leise und ohne viel Aufhebens hinter sich zu (結句反復), obgleich er sich das Leben nehmen wollte. Das Leben (...)(前辞反復).  
(「彼はフロアのドアを後ろ手に閉めた。自殺するつもりであったにもかかわらず、彼は、静かにかつ控えめに背後のドアを閉めた。人生、「……」。」なお、原文の斜体による強調は訳者。)

連続した文章のいずれにおいても、先行する文章の一部が再び取り上げられる。その目的は、計画された行為の元になっている動機を、特に強調することである。つまり、それを引き起こす誘因は、「彼が愛した」人々から「理解され」ないという感情なのである。この若い男が実は家族をすっかり誤解していたのだということは、最後になってようやく明らかになる。その結果、この動機を語法の上で強調することの意図が、彼の誤った判断と実際との間の対照を要所をおさえて照らし出す点にあるのだということは、後になって確認されうるのである。

„Aneinandervorbeisein“ (「すれ違っていること」という新造語——それは恐らく語り手よりもむしろ人生に疲れた男の方に帰されねばならない——でもって、家庭の状況に関する後者のややヒステリックな判断が描写されると同時に、彼自身も敏感な人間、場合によっては過敏な人間として性格づけられる。この印象は、次の節において、積み重なって現れる首句反復 „Das war“ (「それは、「……」だった。)」を通して証明される。この首句反復は、記憶にある前夜の考えをもう一度呼び起こすべきものであり、「すれ違っていること」という新造語や „die er liebte“ (「彼が愛した」)「なお、関係代名詞 „die“ は、先行詞が「人々」の場合も「母親」の場合も同形(訳者注)」という結句反復の繰り返しにおいて頂点に達している。

ここで、語法上の表現力に富んだ、誇張された叙述のように思われるものは、実際には、文体を誤ったある若い語り手の不適切な激情ではない。それは、過度の苦悩の感情——それは物語の進行を通じて、そしてとりわけ楽観的な結末を通じて修正される——を再現するものなのである。

幸運な方向転換は、母親の言葉によって導入される。それらの言葉は、沢山の反復ゆえに、すでに引用された——若い男のことが問題となった——節と、一見文体的に同じように響くかも知れない。だが、ここでの意図は別なものである。母親は、階段の吹き抜きにいる彼女の娘に、石鹸粉の注文を与える。それは父親にとっても、彼女自身にとっても重要だが、とりわけ「あの子」にとって重要であるため、娘（ひよっとしたら下の妹）は、それを決して忘れてはならないのである。母親の——その他の点では無心な——言葉の中には、なんの激情も伴わぬ心づかいと主婦らしいせわしなさの響きがある。彼女はまさに、特に急を要する関心事を日常的な言葉で繰り返すことに慣れていたのである。

「ひっそりと」（この表現は、テキストの中に全部で三回現れる）この世を去るつもりだったのと同じように、ただし今度はこの表現をさらに必要とすることなく、この若い男は再び人生に順応する。結末で彼が自分自身に言い聞かせた言葉は、簡素で、彼がそれ以前に感じていた苦悩の重圧を想起させない。それらは、本質的には母親の言葉を取り上げ、それを繰り返して、かつ縮めて省略したものである。「木を、と彼は言った、ほくは木を取りに行かなきゃならないんだ。わが家のために。明日のために。」この省略の中に、彼を留まるよう促したものがもう一度表現されている。すなわち、彼を頼りにしている家族に対する彼の責任（「わが家のために」と、新たな始まりのために彼が必要とされる未来に対する彼の確信（「明日のために」）である。

この短編は、二つの省略でもって、それが始まったときと同じくふいに終わる。つまり、「毎日。毎日。」この省略によって、個々人の運命の上に実際にふりかかる、あるいはまた誤ってふりかかると思われる暗さにもかかわらず、人生の日々が生きられねばならないという認識が要約されているのである。

### 三、登場人物

この物語の中心には、一人の若い男（「彼」）がいる。彼は、自分の住む単層住宅（特定の階全体を占有するアパート＝訳者注）を後にする。というのも、彼は、自分にとって耐え難くなったこの世での人生を終わらせるといふ固い決心をしたからである。そのさい、彼の理由は実におおざっぱに響き、人生のより詳しい状況がまったく語られないため、漠然としたものに留まる。「彼が愛した」人々とは、（母親を除けば）厳密にはだれなのだろう？彼が「他の人々と一緒に」笑うことができながら、しかも「それ以前より孤独」なのは、なぜなのだろう？まったく明らかなことに、彼と親しい人々、つまり彼の家族は、彼がどのような状態にあるか気づいていない。そして、まさにそのことが彼を苦しめる。だが、「彼」とはだれなのだろう？ここでもまた、報告はおぼろげなものに留まる。明らかになるのは、彼が戦争へ行つたが、他の人々へ行かなかつたということだけである。「それは、彼が銃声を聞いたとき、他の人々はそれを聞かなかつたことだつた。彼らはそれを決して聞こうとしなかつた。」ここには、いずれにせよ、次の点に関する明確な指示がある。つまり、「彼は若い帰還兵であり、自分のトラウマ的体験をまだ消化できておらず、それについて彼と話したいと思う人をまだ見出していないのである。「他の人々」は、最も近い過去のあの陰鬱な出来事を排除しようとしており、それによつて彼の「孤独」を引き起こしているのだろうか？それとも、彼らは、そのことに彼と同じようには気づかなかつたのだろうか？

屋根裏で首をくくろうとしたこの若い男にとって主要な動機は、新しい時代の始まりを告げようとしている環境の中で「理解されな」といふ気持ちである。昼間は、彼は、仮面に過ぎない「笑い」で、自分の涙を彼らから隠している。にもかかわらず。夜ごと泣くとき、彼は、他の人々がそれを聞かないということとを冷淡さと理解するのである。

そのさい明らかになるのは、彼が絶えず自分自身の周りを回っていること、つまり彼の孤独の周りを、他人には気づかれない彼の苦悩の周りを、すなわち彼の憂鬱の周りを回っているということである（「それは、〔……〕」母親が年老いたの

を彼が見たこと、彼がそれを見たことだった。」。彼の自己中心癖は、一度繰り返された „ohne viel Aufgebens“（「ひっそりと」）という表現によって、とりわけ強く表れている。というのも、計画された彼の自殺は言うまでもなく叫び、すなわち注目を、考慮を、彼自身をめぐる „Aufgebens“（「騒ぎ」）を求める叫びなのだからである。

住居から去った後で彼がとった道、つまり「青白い空」が「一番明るかった」屋根裏——これは、彼の死への憧れにとつて象徴的な表現である——へと向かう道を、階段吹き抜きの手すりが際立たせる。「この上」で、彼は、日常の悩み事から解放された存在の明るさへ逃げ込もうとし、永遠の中へ飛びたとうとするのである。

そのさい、それまでごく頻繁に用いられた「彼が愛した」という表現が、もはや決まり文句ではなくなる。というのも、彼の家族の人々は、今、もはやまったく彼の目の前にいないからである。彼の企てが彼らに及ぼす結果は、彼には思い浮かばない。この若い帰還兵は、一切を自分に関係づけること甚だしいので、「彼が愛した人々」への顧慮をすっかりおろそかにしているのである。

ようやく手すりの上の線が、彼の考えを再び他の人々へ向ける。つまり、自分への信頼を彼が以前すでに悪用したことがあり、そして今また、自分の孤独を隠したがゆえに、彼がもつと非常に大きな心痛を準備しようとしている他の人々へである。

階段の吹き抜きを通つて響く母親の言葉は、救済のようであり、ついに彼に分別を取り戻させる。つまり、彼女の言葉は、彼の自殺の試みが失敗した場合のみならず、常に他の人々の愛が彼に向けられているということを彼に証明するのである。（「彼に対する愛と不安に満ちた他の人々の非難のこもった同情した顔つきを我慢せねばならないこと以上の醜態はあるまい。」）母親は彼の助けに頼らざるをえず、木を取ってくるために彼を必要としている。そして、父親にとつても、それは「とても安心なこと」である。それどころか、今や明らかになるように、父親は帰還した息子のことを心配してい

る。「お父さんは、それはあの子にとって楽しいことだろうと言ってるわ。」これらすべてのことが、この若い男に、彼を屋根裏へと追いやった彼の「このすれ違い」の感覚がいかに不当な、誤ったものだったかを証明するのである。

そうして、彼は最終的に、一階の暗がりの中で「ランプが灯って」いる下の方へ「階段を降りて」行く道を見出す。彼は、愛というものは、活動することにおいて、木を取ってくることに、すなわち愛する人々に対する責任を覚悟することにおいて初めて実証されるのだということを確認する。空の青白い光を探すだけでは十分ではない。つまり、彼が不当にもそこから締め出されていると感じていた愛は、具体的に人間が一緒に、お互いのためにいることの中で、ランプの光の中でのみ証明されるのである。自分が家族の中で確たる地位と仕事を持っており、それを実現することの中で「他の人々」に対する自分の愛情を日々新たに証明せねばならないということ、そのことに、彼は突如として気づくのである。

#### 四、短編の意味内容

『明日のための木』の意味は、すでに説明された構造と緊密に結びついている。ボルヒェルトは、解釈のためのすべての本質的な要素が含まれる時空を形成している。すなわち、過去、現在、未来、ならびに空という上部と階段吹き抜きという下部である。そのさい、この短編における木には、実に様々な使用ないし関連において意義が付与される。つまり、この短編において、木は、そのライトモチーフ的機能において、先に考察された短編におけるパンとほぼ同様の役割を演じているのである。

この若い男は、計画した自殺を最も人目をひかない方法で実行するために、賃貸アパートの屋根裏へ行く。つまり、「屋根の骨組みの横梁」の木は、この若い男が用意していた、首吊りによる音を立てない死を保証する。この行為は実行されなかったので、屋根裏の木はその後言及されることはなく、物語の経過にとってそれ以上意味を持たない。

筋の進行の中で、はるかに重要であることが明らかになるのは、階段の手すりの木である。それは、本来は彼を「上へ」、つまり彼の死の企てへ向かって導くべきでありながら、逆に、彼を引き留める。まず彼の注意を喚起するのは、手すりの上にある、ほとんど手で触れて確かめられないほどの、かなり色の薄い線である。それは、この若い男がとつくに後にし、忘れていた例の幼年時代のエピソードを想起させる。自殺の意図の重大さという観点ではまったく別の思考に属するに違いないこの瞬間に、突然、この手すりの木は、とつくに忘れられていた罪の証人となるのである。この若い男は、かつて、無邪気で軽率な悪ふざけでその木を傷めながら、その行為を否定することによって、それに対する結果を、つまり両親に罰せられることを回避した。当時、彼は自分の行為によって課せられた責任から逃れ、臆病にもそれを避けたのである。人生に飽きたこの男は、彼の新たな逃避の試みの瞬間に、彼の以前の、その間にうまく抑圧された逃避の試みを思い出される。そして今、彼は、遅ればせながらそれを償いたいと思うのである。

階段の手すりの木は、この若い男の企てを阻止するに過ぎず、彼に最終的にそれを思いとどまらせるのは、その次に話題になる木である。転換をもたらす木の機能は——それはこの短編の題名からも決定的なものとして認識されるべきなのだ——母親が口にする「明日のための木」である。再び、この若い男はまず思い出さされねばならない。「彼は言った、ぼくは木を取りに行かなきゃならない、もちろんぼくはそのことを忘れていたんだ。」ここでは、木は次のような認識の見出し語となる。つまり、自殺という企ては責任からの再度の逃避を意味するであろうが、ただし今回は、過去の事柄、つまり彼が行ったことに対する責任からの逃避ではなく、未来に対する、すなわち彼が「明日のため」になおやり遂げねばならぬ事柄に対する責任からの逃避を意味するであろうという認識である。

そのさい、母親によって話題にされた木の利用方法に注意が払われぬままであつてはならない。彼女は、洗濯のための水を暖めるためにそれを必要とし、それゆえ、下の娘は、石鹼粉を忘れぬよう強く促される。母親は、洗濯日の準備をす

るのだが、それは、うわべは日常の仕事と見なされうるものの、同時に十分象徴的に見られうる。つまり、彼女は、「汚れた洗濯物（原語 „schmutzige Wäsche“ には「道徳的汚点」の意味もある＝訳者注）」の洗濯の合図を、すなわちそれ以前に家族の共同生活を苦しめたかもしれないぬ一切のものの浄化の合図を出すのである。そのとき、彼女のまなざしは前方に向けられている。

ここからまた、前もってついでのことのように差し挟まれた、「清潔な薄茶色の階段の手すり」の指摘も、理解できるものとなる。その手すりを軽率に破損したと結びついた古い罪は、実際とつくに忘れられ、いわば洗い落とされているのである。それゆえ、実証せねばならないのは、昨日の木の破損を補償することではなく、「明日のための木」のための苦勞を引き受けることなのである。

この物語『明日のための木』の結末は、ボルヒェルトの戯曲『戸口の外』と鋭い対照をなしている。帰還兵のベックマンは、再び組み入れられる機会を得られない。単層住宅は彼にとって打ち解けないままで、彼の人生は「だれも、だれも返事をくれないのか？」というショックな叫び声へといたる。それとは逆に、ここで問題となった短編は宥和的な調子であり、帰還兵の運命にもう一つの結末もありうることを示している。すなわち、絶望の状態は愛の光によって、下の地上で克服されうるということである。

## 付記

この翻訳の底本は、Rainer Könecke: Interpretationshilfen deutsche Kurzgeschichten 1945–1968. 12 Texte und Interpretationen. Sekundarstufe. Stuttgart/Dresden: Klett 1994, S. 50–62, „Wolfgang Borchert: Das Holz für Morgen (1947)“ である。原文においてイタリック体で強調されている箇所は、訳文ではゴシック体で表記した。また、『明日のための木』の邦訳は、訳者の知る範囲では本邦初訳である。なお、解釈

ライナー・ケネツケ著 竹岡健一訳

八四

で使用された「語りの態度」に関する概念の理解については、上記拙訳「ヴォルフガング・ボルヒェルトの『パン』（一九四六年）について」の「付記」（五七〜五八頁）を参照されたい。